

松戸の丘

と
短歌くくみなとえいこ
久々 湊 盈子

松戸の駅から歩いて十分ほどの小高い丘に、水戸藩最後の藩主であった徳川昭武の別邸がある。土地名から戸定邸とじょうていといふこの建物は明治十七年に完成した近世武家屋敷造りで、杉の本丸太や一枚板がふんだんに使われたしつとりとした和風建築である。昭武は徳川慶喜より十六歳年下の異母弟であるが、なぜか二人はうまが合ったようで、明治三十年代には慶喜は何度も松戸を訪れて趣味の写真と一緒に楽しんでいたりする。

昭和二十六年に昭武の嫡男武定によって松戸市に寄贈された屋敷と、それをとりまく庭園は手入れがよく行き届いていて、一年中、いつ行ってみても静かで心地よい。早春の梅、春のしだれ桜、新緑の大樟、夏の竹林、秋の紅葉、冬の一つわぶき等、四阿やぐらに腰をおろしてぼんやりするには持ってこいの場である。

例年、秋に催される松戸市の短歌大会には講師として著名な歌人をお願いしているのだが、まず戸定邸に案内するのがここ数年わたしの役目になっている。ちょうどその時期には敷地内に二本ある飯桐いひごが真っ赤な房実をいっぱいにつけるから、たいがいの人はそれを見て感歎の声をあげ、わたしはまるで自分の手柄のように嬉しくなってしまうのである。

届かざる思いのごとく飯桐の真っ赤な房が秋の陽に照る

返り血を浴びたるように飯桐が総身に真っ赤な房実を垂らす

昨年は船橋歌人グループの吟行会を企画し、そこでわたしはこんな歌を作った。飯桐は十メートルほどの木であるが、葡萄の房のような果穂を全身に下げた姿はまさに返り血を浴びたかのようにであり、誰かに届けようとしても届かない思いのほどかしさに身を揉んでいるかのようにわたしには思えるのだった。

ところで、その戸定邸に隣接する千葉大学園芸学部に大正時代、与謝野晶子が来て短歌をたくさん残している、という話を耳にしたのは、今から三年前、千葉県の短歌大会を松戸市で開催することになり、そのご挨拶に市長室に伺った折のことだった。第二十歌集『瑠璃光』に「松戸の丘」(第二次「明星」掲載)の五十首と、「或る日」(「週刊朝日」掲載)の十首が収められているという。

与謝野晶子といえば誰しもがまず『みだれ髪』の情熱的な歌の数々を思い浮かべるだろう。実際に晶子の代表歌として五十首なり百首なりが挙げられるときには、その半分以上が「みだれ髪」からであり、続いて『恋衣』や『舞姫』、夫の寛を追って渡欧した際の歌を含む『夏から秋へ』、それに亡くなってか

ら平野万里が編んだ最終歌集『白桜集』の順といたるところだ
ろうか。

大正期の晶子はもちろん第一線の歌人として歌集も次々に刊
行している(三年の『夏から秋へ』以下『瑠璃光』まで十四
冊、歌数は五千首を越える)が、それよりも文筆業によって一
家の生計をになう作家・評論家としての活躍の方が特筆される
だろう。年譜を見てみるとこの時期に発表された小説・童話
集・評論集・古典の新訳・随想集などなどの膨大さには驚嘆す
るしかない。しかし、その反面、肝心の短歌そのものは、さし
て目新しい境地を見ることはできないように思われ、わたしも
これまで『瑠璃光』という歌集を意識して読んだことはなかつ
たから、さっそく千葉県立西部図書館に行き、講談社版の全集
第五巻を借り出してきて読んでみた。

『瑠璃光』が出版されたのは大正十四年一月。晶子四十七歳の
ときである。内容は大正十二年七月から十三年七月に到る一年
間の作品から選んだものだが、この一年というのは晶子にとつ
て非常に辛くきびしい期間であった。まず十二年の六月、敬愛
する有島武郎が軽井沢の別荘で婦人記者の波多野秋子と心中を
はかるといふ事件があり、九月には関東大震災に見舞われた。
幸いにして晶子の家は無事であったが、学監をしていた文化学
院が火災にあり、預けてあった『源氏物語』の新訳原稿数千枚
を焼失している。また翌年二月には急性の激しい中耳炎で入
院、手術を受けるという衝撃的な出来事にもつぎつぎ翻弄され
たのであった。だが、歌を読むかぎり個人的な事柄がなまなま
しく歌われるというのではなく、現実的な風景を詠みながら、
そこに中年期となつたつましい哀感を添わせてゆくといった

手法をとっているように思われる。

松戸の丘の晶子の歌はそののち、創立百周年を迎える千葉大
学園芸学部市民からプレゼントしたいという松戸市民劇団の
石上瑠美子さんの発案で歌碑を建立しようという運びとなつ
た。「与謝野晶子の歌碑を建てる一〇〇〇人の会」が発足し、
市民からアンケートによって選ばれたのが次の二首である。

丘の上雲母の色の江戸川の見ゆるあたりの一むらの罌粟
うすものの女の友を待ちえたる松戸の丘のひなげしの花

晶子の罌粟の歌といえはすぐさま(ああ皐月^{さつき}仏蘭西^{フランス}の野は
火の色す君も罌粟^{罌粟}われも罌粟^{罌粟})という有名な一首が思い浮
ぶが、ここ「松戸の丘」でも、六十首中の三十二首に「罌粟
粟」「罌粟」「花菱草(カリフォルニアポピー)」が詠まれてい
る。

新緑の木立を渡る風が心地よい日に、石上さんと園芸学部の
フランス式庭園に真新しい歌碑を見に行ってきた。晶子がこの
地を訪れた頃には今のよう木々が大きく育っていなかっただ
ろうから、大きく蛇行してゆく江戸川がキラキラと見え、遠く
には富士山も望まれたかもしれない。明治、大正の歴史をとど
める松戸の丘にまたひとつ、嬉しいスポットが出来たのであ
る。

次号は西勝洋一さんをお願いします。